令和に向けた
街の豊かさを企画せよ！

マウントフジアーキテクツスタジオ / 芝浦工業大学教授
原田真宏

名城大学教授
生田 京子

椙山女学園大学准教授
橋本 雅好

大同大学専任講師
米澤　隆

未来デザインラボ ディレクター / 愛知淑徳大学講師
間宮 晨一千

-未来の風景をつくる 学生コンペ-

未来の風景をつくる

「社会学、生物学、経済学など
別の視点も合わせた上での
未来像を示せる場になるといいな。」

1. 大きなチャンス

間宮　前回の「未来の風景をつくる」学生コンペから約6年が経ちますが、今回は中電不動産さんとデンソーさんのバックアップを受けて開催できることになりました。前回の10倍以上となる1万平米の敷地面積で街を企画するということで、学生たちがマスターからの提案を考えるという壮大なプロジェクトになっています。イメージとしては、ドイツにはヴァイセンホーフ・ジードルングという実験住宅群がありますが、次の時代に向けた街づくりを、住宅という名のもとで実験的に取り組んでみたい、そこで新しい価値を提案できるかを試してみたいという意図があって、「令和に向けた街の豊かさを企画せよ!」というテーマを設定し、"街の実験場を作ろう"と学生たちにも呼びかけています。そうすることで、名古屋という場所の可能性を引き出せないかなと思っています。まず名古屋の土地柄について感じることはありますか。

原田　前回のコンペもやらせてもらって、最近では名城公園のtonarinoという施設をやらせていただきましたが、名古屋の土地柄として失礼ながら感じるのは、オーダーに対しては歯向かわないというのか、封建的な気質があるのかなと。それに対してこのコンペが面白いのは、通常は与条件（ルール)として与えられる敷地割に対して歯向かうというか（笑）、物申すという機会が与えられたこと。これは建築家にとっても、名古屋にとっても、とてもパンチが効いたお題だと思います。本来ルールというのは与えられるものではなくて皆で作るものであると思うし、敷地割を建築家からフィードバックできる機会は絶対に必要。前回のコンペでも、既存の割り方ではない案が入賞してたよね。ルールに対して物申すということをやったんだと思います。だからこのコンペがそうしたことに対する雛型というか、ロールモデルになればいいなと思っています。

間宮　僕自身も最近感じるのは、クライアントワークをやっていく中で、文化的・創造的に街をもっとこうしていきたいという想いがどんどん薄れていく感覚があって。

原田　それができるチャンスもほぼないよね。敷地は与えられるものだから。例えば、バルセロナでは都市計画部長は現役の建築家で、建築家が土地割からデザインして、どこを誰にやらせるかを決めていく。総合的に幸福になるようにオーダーから建築家がデザインするというやり方です。それが正しいと思うけれど、日本にはそのチャンスがほぼない。

間宮　そうなんですよ。チャンスがないから建築の醍醐味とか本来の面白さを伝えるのが難しい。ある先生とお話しした時に、建築学科の一番の問題点は、卒業した学生が建築を嫌いになることだと。そうした学生が行政に行ってしまうから、建築家がより裁量を振るえなくなってしまう。それには教育にも問題があるわけで。

原田　大学は既存の職業体系に対しての職能を身につける場になってしまっている感じはしますね。その向こうにある生活の幸福さみたいなものが目的として見えなくて、今ある状況に対して今ある建築の職業的なノウハウを学ぶってことになると、そこに面白さを感じられないのかもしれない。

間宮　だから教育は大事だと思うし、チャンスが与えられなければ人も育たない。だからこそ、この地域で育てられた人の価値を創造したいとも思いますよね。名古屋の建築の教育現場については槁本先生にもお聞きしたいです。

槁本　前回のコンペでの学生たちを見ていると、自分の考えたことが実現するかもしれないというところのモチベーションは大きいです。またこうした可能性のあるコンペに興味を示す学生たちは、その先も頑張っていくような気がします。アイデアコンペの上手い人たちが賞を取って終わりではなく、その先に時間をかけてつくられていくかもしれないというリアリティによって、学生の建築への本気度も見えてくる。なので、建築で頑張っていこうという学生が出てくるのを期待しています。生田先生のところの学生はどうですか。

生田　いろんなキャラクターの人が出てほしいですね。東海地区というのは都心もあり、郊外もあり、自然や山中もすべて身近にあるので、学生たちは自分が関わりたい地域に入って活動できていてバリエーション豊かです。逆に言えば、東海地区の広さの割に、建築学生の数が少ない面もありますが。

槁本　学生数も少ないですし、建築をやり続けようとしている学生も少ないかもしれません。特に椙山女学園大学は建築学科ではないので、建築以外の様々な分野に就職していくというのが現実としてありますね。

原田　建築家のもとで修行して、ザ・建築家になることを選ばない学生は東京でも増えています。建築のスキルを持ちながら別のデザインをしたり、廃村の復興をやってみたいとか。これまでの王道ではなく、建築家としてやれることの問い立てを自分たちでしているように思います。皆がいわゆる建築家としての道を歩いていこうとするんじゃなくて、フィールドがいっぱいあるのはすごくいいですよね。そのためには、問いそのものから立てなければならない。今回のコンペでは都市計画的なことが一つの課題だし、その中で住宅をつくるという課題もあります。そこで答えを出すのではなく、まず問題を出しなさいと言っているわけですから、いわゆるコンペキラーの人たちはやりづらいのかもしれない。けれど問題を出す能力というのはこれからの建築家に求められているし、若い建築家たちの関心もそこに移ってきています。建築家のスキルを使って世の中に貢献する道というのが動き始めているんだよね。

槁本　そうした流れの中で行政に行きたいというのはアリですよね。建築が嫌になって行くのではなく、こうすれば街が良くなるということを知った上で与条件を出す側に行き、活躍してもらえるとすごくいいですよね。建築のスキルでそうしたアプローチができることを、このコンペで学生のうちに経験できるのはとても意義があるように思います。

原田　以前ほど職業的な境界線がなくなっているのは確かで、建築家をやりながらディベロッパーだったり、建築家でありながらお金のことが分かったり。建築家のスキルと何かをかけ合

「チャンスが人を育てる。
この地域で育てられた人の
価値を創造したい。」

「アイデアコンペで終わらず、
実現することに大きな意味がある。」

わせると、もっと活動の幅が広がっていくはず。

槁本　いろんな人と組んでこのコンペにチャレンジするのはいいですね。建築のことよりもその先の暮らしのことだったり、この先にどんなことが起きるかを想像するのが得意な人と組むと面白くなるんじゃないかな。

原田　少なくとも30年後は見据えて考えてほしいですね。

2. 30年後は５世代が暮らす時代

原田　若手科学者に2050年の未来像をアンケートした記事があって、それによると平均寿命は150才だそうです。そうなると、５世代が一緒に暮らす世界になるわけですよ。未来といっても、たった30年後のことです。今から30年前はバブルだったし、僕が生まれる30年前は戦時中なわけだし、30年で劇的に世界は変わっていくのだけど、建築家が30年後の未来に対して前もって世界を用意したことは無いんですよね。

一同　無い（笑）。

原田　今回の土地も実際に30年後もずっと使われるものなのに、今の社会的状況に対しての回答を出して、今の人たちが買って、今の暮らしをして、その後には廃れていくだけというのではまずい。すでにこうした未来のデータもあるわけだから、社会学系や生物学系の学生と組んでもいいし、別の視点も合わせた上での未来像を示せる場になるといいですよね。

生田　確かに。情報系の学生と組むことまでは想定できましたが、生物学系とかそこまでドラスティックにいくとすごく広がっていく気がします。

原田　具体的にどんな人が暮らすのかを想定してやった方が面白い。例えばですが、５世代が同居する人たちの暮らしとかね。それに土地の値段。今は周辺に何もないところだと思いますが、上手くいけば高く転売できるかもしれない。経済系の学生も入ってくるとまたリアリティのある提案になるのかなと思いますね。

槁本　不動産がどうなっていくかも重要。古くなったけどこれだけの価値があるかとか。

生田　一斉に入居するとなると、同じような人が住んで、同じように年を取っていくことになりますもんね。

原田　それをどう代謝させて、循環させていくのかを考えるのも面白いですね。今、オフィスを計画する際に、時間としてオフィス勤務を８割にするというのがあるけれど、そうなると２割分は住宅の中がオフィスとなる。その割合が今後増えていくとなると、今の住宅地の作り方ではないですよね。そうした具体的に予測できる潮流がすでにあって、そこを拡大していくのも面白い。

槁本　エネルギーの話もそうですね。ちょっと発想を変えると生活がガラッと変わったりする。そうしたことも入ってくるといいですね。とはいえ、何でもかんでも入れるのではなくて、自分たちの提案の中で特化したものがあるといいのでは。

原田　そうですね、コンペに参加する学生たちは1997年頃に生まれたのかな。ケータイがデフォルト、お金も持たない、そのバージョンの人間だから見れる世界を見せてほしいな。

生田　彼らは何を見ているんでしょう（笑）。

間宮　米澤先生どうですか。

米澤　僕が学生だった2000年代はアイデアコンペ全盛で、前衛的的な建築に憧れを持っている学生もたくさんいました。それが2011年の震災をきっかけにして、ガラッと空気が変わったんですね。一点突破型の先鋭的なアイデアだけでは、結局、現実とはかけ離れた虚構の世界に閉じてしまうことに気づいたんでしょう。それ以降は、自らが街に入っていき、そこのリアリティを拾い集め、それらを基に社会との回路をもちながらも創造性をいかに発揮するかということが問われるようになったのではないかと思います。一方で、挑戦することよりも失敗しないことに意識が向かい、答えがないと不安になってしまう今の日本社会において、希望をもってチャレンジすることやまだ見ぬ夢にワクワクすることも大切にして欲しいものです。今、新しく住宅地を開発することの意味ってなんだろうか。30年後の社会を想像するとなると目の前の局所的問題にとらわれ過ぎず希望ある未来を構想して欲しい。現実に依拠しつつも、どこまで目指すべき理想の射程を広げることに挑戦できるかが問われるのだと思います。

間宮　はい、それがロマンです（笑）。

3. 現実とつながるロマンや未来

間宮　社会が萎縮したり、ダメなんだって思った先というのは、何も手がつけられずに誰も動かなくなってしまいます。だから個々が思うロマンが大事で、それがないと豊かさって創造できなかったと思います。それもただ夢見がちなロマンチストでなく、リアリストでもあること。僕らの社会はもっと良くなるんだと、はっきりと言う若者が出てきた方が絶対に面白いと思う。そうした意味でもロマンが欲しいんですよ。

原田　ロマンとか未来ってものが、現実とかけ離れたものじゃなくて、現実とつながるロマンや未来ね。今回のコンペで面白いのは更地だということ。それは文脈を自分たちで作っていかないといけないってことで、リアリティを持った日常感覚と、マスターの線を引くってことの間にどんな回路を結べるかっていうのが一番スリリングだし、絶対に面白いところ。だってここまで大きな画を描くって、やってないでしょ。

生田　ほんと、こういうのはないですよね。

槁本　鉄塔があるこうした土地に、どんな可能性や良さを見い出すのかっていうことも今までしていないと思います。そもそも「利便性や一般的なメリットが感じられない場所に建物を建てる必要はないよね。」っていう社会だったのが、「もしかしたら社会に何か役立てるかもしれない」とか、「そこで暮らすことで何か得られるかもしれない」という発想をもった価値観が社会的にも生まれている今、そこに対して可能性を感じる人が増えているように思います。だからそういったことが読めるようになって、未来が見えてくるといいですね。この土地で「こんなに楽し

「30年後もその先も、
変化していける仕組みが大切。」

「みんなを共感させる、戦略的なロマンが欲しい。」

く暮らすことができるんだ」と言えれば、ほかの土地に対してもそういう見方をして考えられるようになっていく。その意味は強いんじゃないかと思います。

原田　今ちょうど僕も土地を買おうかと不動産なんかをよく見るんですね。それで見てて思うのが、経済的な視点から言えば、土地割というのは証券の様なものだから、そこには個性やユニークさといった色は付いていない方がいいのだけれど、それでできた街に対して、僕たちは積極的な思い入れができるかといったらそうではないなと。そういうニュートラルなところに魅力を感じないからといって、そのニュートラルを外すためにとんでもないストーリーを持ってきてもダメなわけで。それがロマンなのかは別として、ニュートラルを揺るがせる何かが必要なんだと思う。

間宮　それをロマンと言いましょう（笑）。

原田　ニュートラルを超えるロマンの提案ね（笑）。他のロジックがちゃんと通っていて、自分の日常のリアリティとも地続きで、未来のビジョンと繋がっているような、そういうものを提示してもらえたらすごく面白くなる。もう一歩踏み込むと、土地を買う時ってお金を借りるじゃないですか。不整形地ではお金を貸してもらえないわけだから、整形地ということが担保価値にはなるのだろうけど、それじゃつまらない。どうやればロマンがお金の価値として換算してもらえるかとか、そういうところのストーリーもあると面白くなるよね。担保価値も含めて銀行への説得ができるかどうかで、いい街ができるかどうかが決まると思うから、銀行を口説くような見方が入っているとリアリティが出てくるのかもしれない。

槁本　どこを特徴づけるかが魅力につながりますよね。そういうことをきちんと見つける時間も作って欲しいな。何が生まれて、この先どうなっていくんだろうっていうのは、こういう土地の条件だからこそ気になる部分だから。

原田　最終的に言ったら銀行はロマンは買わない（笑）。買わないんだけど、ロマンを定量的に説明する努力は必要。

生田　かなりハイレベルになってきましたね（笑）。生物学的なことからリアリティ、そして担保価値と。全ては無理かもしれないけれど、１つを突破した何かがあれば。

槁本　今だけでなく将来につながるんだという意識で挑んで欲しい。コンペの中の話で終わるのではなくて、学生の発想から始まったものが後世に残るということに大きな意味があるのだから。

原田　今回の要項には３段階の提案がありますよね。「区画割り」と「住宅設計」の他に、その一つ上の段階として考える「仕組み」というのが、一時では終わらないものになるのかなと。それが普遍性を持っていれば、他の土地でも活用していけると思う。一斉に売り切って大成功ではなくて、そこに時間軸が入ることで、終わらない仕組みづくりになる。実際にディベロッパーサイドにはそうした問題意識はあるのかな？

間宮　大きなディベロッパーであるほど悩んでいる部分ではあると思います。どんなアイデアならいいのか、企業の中の誰もが分からないでいる。だからこそ、こうした機会が出来たのだと思います。誰も分からない未来なら、こうあった方がいいと提示した方が勝ちかなとも思っています。ディベロッパーが困っているということは、受け入れる可能性は大いにあるわけで。そうした意味で、今回の提案は挑戦的であればあるほどいいなと思っています。

4. 街をつくる挑戦的な姿勢を

原田　過去には街を一団地で開発して、それが現在ゴーストタウンになっているという現実があります。僕らはそれを見ているわけだから、次の時代にはどうやって一団地を開発すべきか。生き続けるものにしなければ意味がないよね。若者らしい発想を飛ばして、「なるほどね」と思わせて欲しいな。

間宮　こうした開発の仕方があるんだということをディベロッパーにも示したいですね。本当に街を変えられるチャンスになる。それが若い人たちに与えられているということは、改めてすごいことだと感じます。

原田　挑戦的といっても、実現する可能性もあるんだよね。どこまで飛んだ提案が受け入れられるのだろう。何が最低限ないといけない条件とかね。ある種のリアリティは必要だから事業性を踏まえて、面白いけど成立するか分からないものよりも、面白いし可能性があるよねってところなのかな。

間宮　街の実験場と言った限りは、可能なところまでやりましょうと言いたいです。そこに挑戦がなかったり、リアリズムだけでは味気ない。だからロマンという言葉を使ってしまうのだけれど、そこを汲み取って欲しいな。

原田　これまでに見たことのない、ロマンあるリアリティを示しなさいと（笑）。

米澤　単なる挑戦で終わってしまうことのない、実現に向けたロジックのともなった戦略的なロマンを目指して欲しいですね。それでいて理想と現実のギリギリの境界を提示しこれまでの住宅開発を批評するとともに、挑発的に主催者や事業者に“街の実験場”という言葉を謳っているのだから、この提案に挑戦する覚悟はあるのかを問うくらいの姿勢がよいのではないか。そこには戦略的なロジックと共に同じ夢を見て巻き込んでいける共感というものも必要となるでしょう。

原田　絶対に面白いパラメーターはあるはずだよね。損益分岐点が完売時じゃなくて８年後とかに設定されていると、バリエーションが出て来たりするのかも。そこからは儲かるばっかりとかね（笑）。

槁本　それも一つのアイデアですよね。何十年と続いていく中でプラスになっていく。大切な要素です。

間宮　発売当初はディベロッパーとして収益は低いかもしれないけれど、長期的に見れば価値が担保されていくようなことはあるかもしれない。その理想像の中に経済が見えてくると面白いですね。

原田　基本的にディベロッパーというのは、区画を売り切った

時に縁が切れるものなの？

間宮　そうですね。そして初期設定価格が最高値になります。もし利益分などを他者に渡したとして、その部分が将来にわたって価値を生むというところまで投機できれば、違った街づくりができるようになりますよね。

原田　ディベロッパーが売り切らずに少しだけ持っておくとかね。そうすれば価値が上がっていくことが自分たちのメリットにもなるわけで。この区画が良くなることでみんなが具体的に利益を受けられるとなると、リアリティが出てくるよね。

槁本　いろんな人が縁を切れない関係づくりというか、住民だけでなくディベロッパーもずっと繋がっていく仕組みというのも、これからの社会には必要かもしれないですね。

米澤　そういった意味でもこのコンペが実験場となりオルタナティブな枠組みを生み出し、それが成功すれば、プロトタイプとして未来のスタンダードになっていくとよいなと思います。

間宮　まさに街の実験場ですね。そこに挑戦したい。

生田　一方で、住宅地としてのコネクションがあまり強すぎても身動きが取れなくなってしまいます。個人的に動く人たちが住宅地じゃなくしていってもいいわけで。個々の意思だけでも変わっていけたり、敷地が他の用途にも転用されていく余地のあるものであって欲しい。住宅だけで構成されるニュータウンではなく、時代に応じてダイナミックに変わっていける要素を含んでいること。

槁本　30年後の変化を受け入れる余地がなくなるのは、やはり避けたいですね。

原田　そうなると、提案のかなりの部分が制度論的な話にもなるかもしれない。最初は住宅地から始まるんだけど、だんだんいろんなものが混ざってきた時にどう対応できるかとか。

生田　最初から混ぜていたとしても、それが30年後も全く同じように機能しているとは思えないから、混ぜ込み方も自由に変化していけるような状況はあった方がいいですよね。入ってきた人たちの変化を反映していけるシステムというか。

槁本　こうやって話しているといろんな可能性を感じられるんだけど、これをまとめるとなると、かなり難しいですよね。

生田　それでも、あるところで線は引かなければならないですからね。

槁本　その線引きがデザインすることであって、引くべきところをしっかりと考えて決めていれば、質問されても答えられるはず。いい加減だとすぐにバレてしまうけどね（笑）。

原田　かといって何も引かずに真っ白なままでは、人は住めないわけで。だから制約がいるんだよね。始まるための制約。フェアでルールはちゃんとしているんだけど、融通性のある制約。

生田　１軒の住宅じゃなくこれだけ大規模な物件ってあまりないけれど、大規模だから色々と考えられますよね。

原田　事業性はどのくらいをイメージして考えているんだろう。（図面を見て）ここにある区画割の図面は公開されるの？

間宮　参考区画として公開する予定です。

原田　じゃあ、これを超える挑戦的なリアリティを！ってことだね。（図面を見ながら）こうやって見ていると、この辺とか魅力的だよね（笑）。普通にやったらただの変なところ。

生田　かわいそう、みたいなね（笑）。

原田　この開発区域は見に行けるのかな？

間宮　はい、公開されます。今は平地の草むらですね。

生田　本当にニュートラルなところに線を引かなければならない状態なんですね。こうしたことは都市計画の授業でもやってないはず。

槁本　僕らでもあまりしないんだから、学生にとってはやったことないでしょうね。

間宮　この地域のブランド価値を生む提案を、令和になって初めて発表されるだろう学生コンペで募集します。長期的なブランド価値を創ることを苦手としてきたディベロッパーに向けて、このコンペで新しい時代の街の価値や豊かさを示したい。

原田　こうなると、自分も考えたくなっちゃうね（笑）。

生田　話がこれ以上続くと原田さんから案が出てきそう（笑）。

間宮　それはまたの機会にして（笑）。ここで出た話題を大きなヒントにして、学生たちから生まれる若いアイデアに期待するとしましょう。

（終）

審査委員長	建築家 原田 真宏 マウントフジアーキテクツスタジオ / 芝浦工業大学教授
モデレーター	間宮 晨一千 未来デザインラボ ディレクター/ 愛知淑徳大学講師
企画委員会	生田 京子 名城大学教授
企画委員会	槁本 雅好 椙山女学園大学准教授
企画委員会	米澤　隆 大同大学専任講師

同時開催
審査員によるレクチャー

コンペと同時に審査員によるレクチャーを開催します。

●5/14(火)
「次世代の豊かさとこれからの建築」
建築家
原田真宏
マウントフジアーキテクツスタジオ主宰/
芝浦工業大学教授

●6/27(木)
「1 階から考える未来のまちづくり」
建築コミュニケーター
田中元子
グランドレベル代表

●8/23(金)
不動産プロデューサー
林厚見
SPEAC共同代表 / 東京R不動産 ディレクター

●9/14(土)
建築家
藤村龍至
東京藝術大学准教授/ RFA 主宰

●10月上旬(表彰式と同日開催)
起業支援家
牧野隆弘
名古屋大学客員教授/未来プロジェクト代表

レクチャーの様子はホームページのレポートで順次公開いたします。